ｓｋｙ-そら-

夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｋｙ―そら―

【Ｎコード】
Ｎ５２０４Ｇ

【作者名】
夏

【あらすじ】
主人公の少年「空」は、ずっと一人ぼっちだった。
でも、ある日をきっかけに、友達が３人で来た。
今まで味わったことのない、楽しい日々を送っていた空だったが、悲劇がまた空を襲う。
自身の過去、生い立ちに振り回される空の物語が、今ここに明かされる。

みたいな感じですよ～。なんかかっこよくまとまった☆

第一話　外の世界

ここは、日本の裏にある、もう一つの日本

ここでは、ある一族が国を仕切っていた

だが、ある日国のおさが、裏切り日本は一度壊滅の危機にさらされ

その一族は暗殺された。たった一人を残して・・・

日本はある男によって復帰し、今は以前よりも良くなっている

そんな日本に住む空は、人々から孤立していた

なぜなら彼が・・・

暗殺された一族のたった一人の生き残りだから・・・

でも、空にそのことは告げられなかった

俺の名前は空。

俺には何もない。

親も、友達も、信頼できる人も

俺には何もできない。

遊ぶことも、ケンカすることも、誰かの名前を呼ぶことも

俺は決して自由になることなんてない

決して・・・
俺はいつも一人ぼっち・・・
どこに行っても、何をしていても
一人ぼっち
どうして俺は生きてるんだろう
どうして俺は生まれてきたのだろう
どうして俺は・・・

俺の一日は何も変わらない
朝目が覚めたら顔洗って、国のやつらが買ってきたおにぎり食べて
部屋ん中で一人、ボーッとして過ごす
そんで、昼になったら、国のやつがきて検査をする
変なもんが見つかると、俺はすぐ監禁所行きだ
さみしいと思ったことはなかった。これが普通だと思ってたから。
俺が5歳になるまで
一度も外に出させてもらえなかった。だから、家族とか友達とか、
外の人の生活とかそういうの
全く知らなかった・・・いつも中で見てるだけで、俺にとっては知
らない世界だった
でも、6歳になったとき、初めて外に出ていいと言われた
俺は、すぐに外に飛び出した。でもそこから俺の地獄は始まったん
だ。
外に出た瞬間、人々の視線が痛いほど突き刺さってきた
さっきまでにぎやかだった町が静かになり、重い空気に変わった
俺は耐えられなくなって、逃げだした・・・無我夢中で走って、や
っと着いたのが公園だった
そこには俺と同じくらいの年の子がたくさんいた

少し安心して公園の中に入ると、ボールが転がってきた。俺が手に取ると、このボールの持ち主
らしき子がきて、こう言った

「一緒に遊ぶ？」

俺はうれしくてすぐに返事をしようとした。すると・・・

「だめよ！」

と言って、女の人がすごい顔をしてやってきた。たぶんこの子のお母さんだろう

「この子とは遊んじゃダメ。」

「どうして？」

「だってこの子は・・・」

そういいかけると、公園は静まり返った・・・

「ううん。今日はもう帰ろう。」

そう言うとその男の子と、母親は帰っていった。それと同時に、遊んでいた子たちも全員
いなくなってしまった・・・
また独りぼっちだ・・・すると公園にいつもの国の人が来た。

「初めての外の世界はどうだった？」

「・・・・」

「まぁいい。明日からは学校に行ってもらう。」

「がっこう？」

「そうだ。明日行ってみればわかる。じゃあな」

「ご飯は？」

「もう外に出られるようになったんだ。自分でどうにかしろ。」

そう言って、その男は去っていった

第二話　孤独

次の日。俺は学校に行った
そこには俺と同じ年の子がたくさんいた
でも、昨日と全く同じだ・・・
教室に入ると痛いほどの視線が刺さってきて
俺の周りから人は消えた・・・
そんときの俺はそれがまだ辛かった
授業ではみんな手をあげて答えているのに
俺は一人何も分からなかった・・・
だって俺は、字も書けないし、算数なんて一度もしたことがなかった
唯一できることといったら体育だけだろう
でも、そんな体育も、誰も俺を入れてくれなくて、いつも一人でボールで遊んだりしていた

そんなある日の昼休み。一人でボールをけって遊んでいると一人の男の子がやってきて

「ジャマなんだよ。そんなボール遊びすんなら、あっちでやっててくれない？」

と言って、ボールをけった
俺はとぼとぼ歩きながらとりに行った・・・。ボールは、グラウンドの一番端の大きな
木に引っ掛かっていた
そこには、たった一つ、木の枝からつるされてできたブランコがあ

った
そのブランコは、他の遊具からはずれて、一人さみしそうに風に揺れていた・・・
俺は涙が出た
そのブランコがまるで俺のようだったから・・・
なぜかはわからないけど、すべての人から嫌われて・・・
一人ぼっちで・・・
でも悲しいと思ったことはなかった・・・
だって、この孤独は”悲しい“ってもんじゃなかったから・・・

”つらい“だったから・・・

今まではこの孤独が当たり前だと思っていた。でも、外の世界に出てみて、みんな家族を持っていて、友達もいて・・・
それがわかると急に俺の孤独が分かってきて・・・
幸せに暮らしている人たちや、俺をにらんでくる奴らを
憎んで憎んで・・・でも多すぎてきりがなくって・・・
俺は一生この孤独といっしょに生きていくんだと思うと、一番つらかった・・・

そんな孤独と戦いながらあっという間に3年が過ぎて、俺は9歳だ
どうせこの1年もこれまでと同じように無駄に過ぎていくだけだ・・
・

そう思ってた・・・

第三話　横木雄大

僕の名前は横木　雄大（よこぎ　まさひろ）
僕はこの学校に入学してきた頃、いつも一人ぼっちだった
僕は人よりも少し体が大きくて鈍くて、頭が悪いからはずされてた
でも、そんな僕に

「お前とは気が合うかも知れねー」

と言ってくれた子がいた。その子は今、僕の親友だ
でも今、同じクラスに一人ぼっちの子がいる

昼休み。僕は親友のタツヤと一緒に屋上に上った
タツヤは寝転がってボーっとしてる
僕は手すりに寄りかかってグラウンドを見ていた
グラウンドのはしには、一つだけ大きな木が立っている
そこには他の木が邪魔になってよく見えないけど、ブランコがあった
一人ぼっちの子はいつもあそこに座ってどこか遠くを見つめてる
僕はタツヤと仲良くなってからここに来るたびにその子をみていた
そして、昼休みが終わって僕はタツヤを起こして教室に帰る
その一人ぼっちの子の名前はソラ君だ

次の日の昼休みも僕らは屋上に上って来た
ソラ君はやっぱりあそこにいる

すると今日は珍しくタツヤが寝転がらないで僕の隣にきた。そして
「お前さぁ、昨日も思ったんだけど、何をそんなに見つめてんの？」
と聞いてきた。僕はびくっと反応してしまった
「なんかあんのか？」
「別に何もないよ？」
そう言って僕はちらっとあのブランコのほうを見た
タツヤはそれを見逃さなかった
「あのでかい木になんかあんのか？どれどれ・・・」
そう言うとタツヤは乗り出して見ていた
僕は下を向いてタツヤの反応を待った
「別に何もねぇけど・・・」
僕ははっとして見てみた。すると、タツヤが行っていた通り、ソラ君はいなかった
「変なやつ。」
そう言って、タツヤはいつものように寝っ転がった
別に見られてもいいのに、なんで僕はこんなに隠そうとするんだろう・・・
タツヤはやさしいから、いつも一人ぼっちでさみしそうにブランコに座るソラ君を見たら

きっと友達になる・・・
そしたら、こんな鈍感な僕のことなんて捨てちゃう・・・
僕はそのまま今日一日が終わってほっとした。でもそれと同じくらい、心が苦しくなった

第四話　比良元辰哉

俺の名前は比良元　辰哉（ひらもと　たつや）
最近マサヒロの様子がおかしい
俺らは昼休みになると屋上に上る
んで、俺は寝っ転がって空見ながら寝るんだ
でも、マサヒロはグラウンドの端っこをいつも悲しそうに見ている
顔は見てねぇけど、なんとなくわかる。なんせ、もう3年以上の付き合いだからな
ある日俺は思い切って聞いてみた
そしたらマサヒロはすごく困ったような顔して「別になにもないよ？」
と言っててきた。これは怪しい
あいつがはっきりいわね―時はなんかある時だ
でも、あいつが見てたところを見ても何もない
俺が「なにもねー」って言うと、あいつはすっげーほっとしてあの木にぶら下がってる
ブランコをみた

次の日の昼休み。俺は給食当番の帰りにこっそりあのブランコのところに行ってみた
するとそこにいたのは、ソラだった。
俺はびっくりして思わず木の陰に隠れた
俺はこれ以上ここにいたらまずいと思って、走ってマサヒロの所にいった

「ごめんごめん。途中で便所に行ってた！」

「ふーん」

マサヒロはなんだか疑ってるような顔で見てきた
まぁとりあえずいつものように屋上に行った
すると珍しくマサヒロが俺の隣に座ってきた

「ねぇタツヤ。行ってきたんでしょ？あのブランコのところに」

さすがマサヒロだ。見抜いてやがった・・・

「ああ。ごめん・・・」

「なんであやまるの？」

「やっ、なんとなく・・・」

「ふーん・・・タツヤはどう思う？」

「ソラか・・・」

それから沈黙が続いた
最初に口を開いたのはマサヒロだった

「タツヤはやさしいから。きっとあのことも友達になると思ってた。
だから・・・いやだったん　だ」

「マサヒロ？」

するとマサヒロは目に涙をためながら続けた

「タツヤがあの子と友達になったら、僕は捨てられる。僕鈍感だし、馬鹿だし・・・」

「お前そんなこと気にしてたのかよ・・・。言っちゃわりィけど、ソラだって馬鹿だぜ？それ
に、お前のことそんな風に思ったことない。お前は、俺が友達になりたいって思ったからこう　やってつるんでんだよ。お前が、俺にソラと友達になってほしくないって言うんなら、俺はな　らない。お前は俺の親友だ。安心しろ。」

「本当？」

「ああ。まじだ！信じろ」

すると、マサヒロは安心したのか、涙を一粒だけ流して一番の笑顔で笑った。
俺も、つられて笑った。

第五話　明光乙樹

俺の名前は明光　乙樹（あけみつ　いつき）
学校の先生をしている
今日は、遠足だ
保護者同伴で山を登る。今日保護者がいないのは2人いる。その一人はソラだ
新学年になってこのクラスを受け持つようになってから、俺はよくソラのことを気にかけている

「よーし。みんなそろったな。これから山を登っていく。途中で休憩所があるから、そこで一回
　写真撮るぞ。」

みんなはしゃいでて、俺の話なんて聞いてない。
ソラは……相変わらず一人だ。
そんなことを考えている間に出発した。
ソラはずっと一人で列の一番最後をとぼとぼ歩いていた。しかも間をわざと大きくあけながら…
あっという間に休憩所につき、みんなイスに座り込んだ。
さすがに山道はきつかった。
子供たちは遊んだり、親たちはおしゃべりしてる。
そこで、はじめて気づいた。

「ソラがいない！！」

ずっと一人で耐えられなくなって帰ってしまったのだろうか？
それとも途中で迷子になったり、事故にあったりしたのでは…？
俺は急いで休憩所を飛び出した。そしたらソラは、休憩所の看板の下にちょこんと座っていた。
思わず安心して息が漏れた。
ソラは突然飛び出してきた俺にびっくりしているようだった。

「ソラ。中に入らないのか？」

ソラはうつむいてうなずいた。
俺はとりあえず隣に座った。

「どうして来ないんだよ。いなくなったかと思って焦ったんだぞ？」

「・・・・・」

ソラは相変わらず黙ったままだ。とにかく凄い汗だったから、水をやった。
するとソラはすごく驚いて、

「俺にくれんのか？！」

と聞いてきた。

「そうだよ？どうして？」

するとソラはまたうつむいて、言ってきた。

「俺に何かをくれる人なんていなかったから。」

そして、また続ける。

「俺があの中に入ったら、せっかくの遠足が台無しになるから。俺、みんなに嫌われてるから。
　みんなが楽しみにしてた遠足だから、壊したくないんだよ。」

それを聞いて、俺は初めてソラのことを知った気がした。
これまでは、すれ違ったりする程度で、深くかかわったことはなかったけど・・・
顔色も変えずにさらっとこんな苦しいことを言っているソラが辛くて・・・そのくせ、すごく優しい心を持っているソラが急にかわいそうになって、涙が出てきた。
それに気づいたソラはあわてて

「俺とかかわったら、ろくなことが起きないんだよ！知ってんだろ？」

といって、離れていった。
きっとソラは幼いころからこんなことを毎回聞いていたのだろう・・・
聞きたくもないのに・・・耳をふさいで苦しんでいるソラの姿が目に浮かんできた
俺はそんなソラをひっぱって、抱きしめた。

「大丈夫・・・俺は大丈夫だよ？」

「？？？」

俺ら大人は、ソラを警戒人物として、扱ってきた。
そんな大人につられて子供たちも同じように接して、

ソラから離れていった。
何をしたわけでもないのに
少し町を出ただけで、脱走と思われて罰を与えられて
でもソラはそのことを当たり前のように受け入れていて…
俺は生徒のことをよく見ていて、子供のことをほとんど分かっているつもりだった。
でも、こんなにすぐ近くに、何も分かってやれていなかった子がいた。
その子はまだ小さくて、全然頼りなくって、子供だった。
この子には親がいない。守ってくれる人も、頼れる人もいない。
俺が守らなきゃ。じゃないとこの小さな体はぼろぼろに崩れてしまう気がした。

休憩が終わって、山頂を目指して歩き始めた。
ソラはまた、列の一番最後を、わざと大きく離れて、とぼとぼ歩いていた。

第六話　『うれし涙』

やっと山頂についた
そこから見える光景は絶景だった
ここは、ちょっとした遊具が置いてあり、とても広いグラウンドがある。
ここで、やっと昼食だ

「はーい。ここで昼ご飯を食べるぞ～。」

そう言うとみんな、友達のところへ行って、シートを敷き始めた。
親もそれについて行って、親同士でのおしゃべりが始まった。
俺はソラを探した。
でも、どこを探してもいない。
公園の看板の下。トイレの裏。グラウンドの端。
探してみるがやっぱり、ソラはいない。すると、さびているブランコの「ギー」という音が聞こえてきた。
行ってみると、そこにはソラがいた。
学校でもいつもブランコに乗っている。
それも、一つしかないブランコに…
二つ並んでいるブランコもあるのに、ソラはいつも一つしかないブランコに座っている。
こぐわけでもなく、ただじっと座って・・・

「よッ、ソラ。」

「イツキ先生……」

ソラはまたうつむいていた。ソラの髪は銀色のなかに黒色が混ざっ

ていて、太陽の光をうけるとキラキラ輝いた。

「ブランコ好きなのか？」

「まぁ」

「弁当は？」

「ない。」

「持ってこなかったのか？あれだけ持って来いって言ったじゃないか？」

「買ってくる時間がなかったんだよ・・・」

するとソラのお腹から”グー”という音が聞こえてきた。

「ほれ。」

俺がおにぎりを差し出すと、ソラは水をやった時のように驚いていた。

「くれんのか！？」

「ああ。コンビニのだけどな？ほら、食え！」

すると、ソラは少し戸惑いながらもおにぎりを複雑な袋から出して一口食べた。

そしてまた一口。一口と…

半分くらい食べるとソラは口を開いた。

「なぁ。イツキ先生？先生はどうして俺にいろんなものをくれるんだよ？ほっとけばいいに…」

俺は返事に困った。
お前がかわいそうで、見てられなかった
なんて言えない。だって、俺ら大人がソラにこんな苦しみ与えていたのだから・・・

「なんでだろうな・・・？」

あいまいな返事をしてしまった。

「今までの先生達は、俺に目も合わせてくれなかった。給食だって、みんながつぎ終わってから
俺が最後に残ったものをとるんだ。時々残ってなくて、食べない日もあった。だからさ・・・
イツキ先生がおにぎりくれて、やさしくしてくれてすごくうれしいんだと思う。なのに・・・　なのにさ・・・」

ソラの目からは涙があふれていた。

「どうして涙が出るんだろう・・・？悲しくなんかないのに・・・
どうして・・・」

俺はそんなソラを抱きしめた。
ソラは声を必死にこらえながらわずかに震えて泣いていた。
だが、次第に嗚咽が漏れだして大きくふるえながら泣いた。

「ソラ・・・その涙はな、悲しいから出てるんじゃないんだぞ？そ

れは、『うれし涙』って
言うんだ。」
「うれし・・・涙ッ？」
「ああ。そうだ。うれしくてたまらないときに出る涙なんだ」
「ははッ。そっか。俺って今うれしいんだ。」
そう言うとソラは満面の笑みで笑った。
笑った顔はどこかあどけなくて、やっぱり子供だった。

第七話　桐沢翔

俺の名前は桐沢　翔（きりさわ　かける）

今は、算数の時間だ。
新しく４年生になって、気になる奴がいる
そいつの名前はソラって言うらしい
そいつはいつも一人で、空を眺めてる
昼休みも一つしかないブランコに座って空をながめてる
でも、その背中は何だか悲しそうで、つい気を取られてしまう・・・
俺が、初めてこのクラスになって、ソラに話しかけようとしたら、
クラスのやつらが止めた
理由を聞いたら、「お母さんが怒るから」だの「あいつといたらろくなことがおきない」だの
わけのわからん理由ばかりつけてくる
俺は、はっきりしないことが大っきらいだ
でも俺も、話しかけることも、近寄ることすらできなかった・・・
この前の遠足で、俺の親は仕事でこれなかったから、友達と一緒にいた
俺はトイレに行くと言って、一人で向かった
そこでソラがイツキ先生に抱きついて大泣きしてるのをみちまった・・・
そんでそのあとスンゲー笑顔で笑ってんの見て
その笑顔が頭から離れなくなった・・・
いつも、眉間にしわよせて、怒ってるような顔ばっかりしてたから
あいつでも笑うんだな～って思っちまった
そんなこと思ってたら、当たっちまった・・・；

「カケル、この問題を黒板にといてくれ。」

「はーい。」

やっべぇ～、全然わかんねぇ！

「せっ先生、パス！わかんね」

「わかんねッてなぁ～。」

そう言うとクラス中で笑いが起きた。
するとイツキ先生は珍しく説教もなしに

「仕方ない。座っていいぞ！」

と言ってきた。まぁ、怒られないですんでよかったけど・・・

「じゃあ、ソラ。わかるか？」

クラス中が静かになった。イツキ先生、それはダメだろーと思いながらソラを見た
ソラはとりあえず前に来て、黒板の前で考えているようだった
俺は、こいつの算数の点数を一度だけ見たことがあるが、悲惨だった…
こいつにはこの問題解けっこねえな
けど、ソラは答えのところに数字を書き始めた。

「正解だっ！すごいなソラ！」

セッ正解！！！！

「どうやって答えを求めたんだ？」

もうイツキ先生の声なんて聞こえちゃいねぇ・・・・

俺が解けなかったのに・・・

「適当。」

「えっ？」

はッ？

はぁ～！なんか、こいつのマグレに本気でショックを受けてた俺って・・・・

そう思うとなんか笑えてきた

「ははははは！なんだよマグレかよ！ははははw」

するとクラス中でまた笑いが起きた。

俺は笑いすぎて苦しくて、腹抱えて笑った。

ソラも笑ってた。今度はちょっと照れながら

帰り道、俺は算数の授業のことを思い出してた

「こえ―奴だなって思ってたけど、結構面白い奴じゃん。

友達になったら、楽しいかもなぁ～

今度声かけられっかな～」

第八話　変化

あさ目が覚めて、学校へ行く
その道で俺は痛いほどの視線をあびながら歩くんだ
何も変わらない道。何も変わらない視線
でも、一つだけ変わったことがある
それは・・・

「ソラー。おはよう。」

「おっ、おはよう・・・」

担任のイツキ先生だ
初めて俺に優しくしてくれた人
初めて、俺が信頼できると思った人だ・・・
でも、わからないんだ・・・
今まで、人と接することなんて一度もなかった俺が。どうやって先生と接していけばいいのか・・・
それどころか、無意識のままに人を拒んでしまう・・・
あんなにうれしかったのに・・・
初めてやさしくされて、涙が出るほどうれしくて・・・
でも、やっぱり人が怖い・・・

あっという間に給食の時間になり
みんなはもう食べ始めていた。今日の給食はカレーだ。でも、あまりはなかった・・・

「今日の昼飯はなしか・・・」

一人で呟きながら席に着き、あまりの日の温かさに気持ち良くなって、寝てしまった

俺は誰かに肩を叩かれたような気がして目が覚めた

うつろな目を開けて顔をあげると、そこには同じクラスの桐沢って人がいた

俺はびっくりして目を見開いた

「うわっ。なんだよ、こっちまでビビっちまったじゃねーか」

「・・・・」

俺に話しかけてる？この人は俺のこと避けないんだろうか？

「なぁおい。ソラ。だっけ？」

俺はびっくりしすぎて声も出なかったから、コクンとうなずいた

「今日家帰ったら、俺と遊ばねェ？」

「えっ？」

今・・・なんていった？

遊ぶ？俺と？どうして？

俺はあまりの驚きに混乱状態に陥った

俺の返事の遅さに桐沢って人は恐る恐る聞いてきた

「でさ・・・いいの？」

「えっ？」

「だから・・・遊ぶのか遊ばないのか・・・」

「えっと・・・」

返事が分からない。遊びたいけど、俺と遊んだりなんかしたら、桐沢って人はきっと後悔するだろう
それに・・・遊び方なんて知らない・・・
すると、迷っている俺に気づいたのか、桐沢って人は言ってきた

「あーも！んじゃ、遊ぶな！ってか遊べ！」

「えっ・・・」

「なっ！」

そう言うと、桐沢って人はニシシっと笑った

第九話　理由なんてない

学校が終わって、みんなが教室を出始める
俺はランドセルに荷物を詰め込んでひとつ大きく深呼吸した

「よしッ」

ソラは空を眺めていた
誰かを遊びに誘うのってこんなに緊張したっけ？
そう思いながら、俺はソラに声をかけた

「よお。俺たちも帰ろうぜ」

声が震えた・・・
ソラは不思議そうに俺を見ながらうなずいた

教室を出てげた箱へ向かう
ソラは俺の後ろを歩いていた
いろんな人が俺らを見て驚いた顔をしている
俺は恥ずかしかった。こんなに注目されることなんてなかったから・・・
まるで、全校朝会で作文を読んでるやつみたいな感じだ・・・
俺らはただ無言で歩いていた
俺は耐えきれなくなって適当に話をした

「俺は桐沢　翔。って知ってるよな！俺のことはカケルって呼んで

いいぜ」

「ああ、うん。」

「なぁお前のことさ、ソラって呼んでいいか？」

「ああ、いいよ」

「ソラさ、今日給食食べてなかっただろ？お腹すいてねぇのか？」

「ああ、別に」

さっきからソラは「ああ・・・」としか答えない
俺らはとりあえず公園のブランコに座ることにした
すると、今度はソラが話を始めた

「なぁ。カケル・・・はさ、なんで俺と遊ぶんだよ？」

「えっ？」

「だって、知ってんだろ？俺と絡むとろくなことが起きないって・・・それに、お母さんに怒られるんじゃねーの？」

「なんで？お前と遊ぶと怒られんのか？お前、言ってる意味わかんねぇよ」

「やっぱり変だ。だって、俺と遊ぶなんておかしい。俺皆に嫌われてるんだぜ？」

「だから？」

「だから・・・」

「要するに、ソラは俺と遊びたくねェってことか？」

「違う！そんなんじゃ・・・ないけど・・・」

「じゃあなんだよ」

俺ははっきりしねぇことが嫌いだ。イライラしてきて口調が荒っぽくなってきた

「俺は、カケルに誘ってもらえてうれしかった。すごく・・・すごくうれしかったんだ。」

「じゃあそれでいいじゃん。」

「えっ？」

「うれしかったんだろ？周りのことなんかどうでもいいじゃねーか。俺らがいいなら、俺らが楽しいならそれでいいんじゃねェのか？」

俺はそのまま続けた

「親に怒られるだのろくなことが起きないだのウルセーんだよ。俺は、俺がお前と遊びたいと思ったから今こうしてるんだよ。他のやつらが何いってきても関係ねー。親に怒られたっていい。だから、そんな難しいこと考えんなよ。なっ！」

そう言って俺はニシシっと笑った
するとソラは初めて俺の目を見て笑った
その目に涙がたまってた。でも俺は気にしなかった
だってそれはきっと、うれし涙だから

第十話　頂点・どん底

俺らは日が暮れるまで遊んだ
今日という日がもっと長くなればいいのに・・・
そう思った。初めてそう思った
今日は周りの視線がどんなに刺さってきても
国のやつらが検査しにきても
何も気にならなかった
今までは明日が来るのが怖くて
このまま永遠に夢の中に入れたらいいのにと思っていた
だって、夢の中では家族がいて、友達もいて
すごく楽しかったから
でも今は明日が待ち遠しい
明日になったら走って学校に行こう
そしたら今度は、カケルにも「おはよう」って言えるんだ

次の日俺は走って学校に行った
俺はいつも遅刻ギリギリに学校に行く
それには理由がちゃんとある
それは、人が少ないから
早く出る時は仕事をしている人がたくさん歩いていて、中間は、学校に行く人がたくさんいる
だからこの時間帯が一番良かったんだ

靴をげた箱に入れてドキドキしながら教室に近づいていった
すると教室に入って行こうとするカケルの姿が見えた
俺も走って後を追った。でも教室の前に行くと険悪なムードになっていた
俺は教室の後ろのドアのほうに行った。するとひそひそ話がたくさん聞こえてきた

「ねぇ。カケル君昨日ソラと遊んだんだって」

「えー！うっそ。最悪じゃん」

「信じらんねー」

俺は必死に気配を消しながらカケルを見てみた・・・
そしたらカケル君は下を向いていた・・・
いつも笑ってばっかりで、いつもみんなの中心にいたのに・・・
俺と一緒に遊んだせいで・・・

俺は無意識のうちにドアを開けて叫んでいた

「桐沢って人は俺が無理やり誘ったんだよ！そいつは悪くない！そいつは俺のこと大っきらいだ　って言ってた！だからそいつは関係ねぇよ・・・」

そう言って俺は走って学校を出た

何やってるんだろう・・・

バカだよ・・・カケル・・・

だからろくなこと起きないって言ったのに・・・

第十一話　思い

ソラが走って出て行ってから教室は静まり返った
その沈黙を破ったのはいっつも二人で一緒にいる
マサヒロとタツヤだった

「おはようカケル。どうしたの？こんなところで立ち止まって・・・
」

「いや・・・おはよう・・・」

「おい。マサヒロ、早く入れよ」

「ああ、ごめんタツヤ」

そして教室はいつものようにぎやかになった

「カケルごめん・・・そんなの知らなくて、勝手な思い込みで」

「いや。別に・・・」

「そうだよな！カケルがあんなやつと遊ぶ訳ねーよな！」

そーだよ。と言うが教室中で聞こえてきた
するとイツキ先生が来ていつも通りの学校が始まった
でも、俺は胸が苦しかった・・・
言い返せなかった・・・

「大っきらいじゃない！俺が誘ったんだ！」て・・・

俺が遊ぼうって誘ったのに、ソラのせいにして俺は・・・
俺は逃げたんだ・・・
最低だ・・・
昨日母ちゃんに聞いてみたんだ

「なぁ母ちゃん。どうしてソラと遊んじゃいけないの？」
すると母ちゃんは黙ったまま困ったような顔をしていた
しばらくして俺の前に座ってこう言ってきた
「母ちゃんはカケルがソラと遊ぶことは別にいんだよ・・・でも、ソラと遊んだらカケルはきっ
　と辛い思いをする。それに耐えきれるならカケルの好きにしなさい。」

本当だった。こんなにつらいとは思わなかった・・・
ソラと遊んだら学校のみんなが敵になる
でも、だからってソラを裏切りたくない
どうすればいいんだろう・・・わかんねーよ・・・

いつの間にか昼休みになって
一人教室で考え込んで顔を伏せているとイツキ先生がやってきた

「カケル。どうしたんだ？」

俺はすべてをイツキ先生に話した
ソラと遊んだこと。すごく楽しかったこと。母ちゃんに言われたこと。今日の朝みんながすごく怖かった
こと。そして、ソラを傷つけてしまったこと・・・
すると先生はすごく優しい顔で教えてくれた

「たぶん、ソラも同じようなこと思ってると思うぞ。」

「えっ？」

「自分と遊んでせいでカケルにつらい思いをさせてしまった。カケルを傷つけてしまった。ってな」

「そんな！ソラは関係ねーのに・・・俺が誘ったのに・・・俺が悪いのに・・・」

「それをソラに伝えてやればいいんじゃないか？それに、みんなが怖いなら、みんなにもソラを　好きになってもらえばいいじゃないか。カケルはどうしてソラと遊びたいって思ったんだ？」

「それは・・・算数の時、ソラが適当に言った答えがあたってて、それがすごくおもしろくて」

「そっか。じゃみんなにもそう思ってもらおう！ソラはおもしろい奴なんだって。なっ！」

イツキ先生がニシシっと笑った

その笑顔が何だかたくましく見えた・・・

今日学校が終わったらソラに会いに行こう

そんで仲直りして、みんなに分かってもらうんだ。

ソラを認めさせるんだ！

第十二話　空は何処

学校が終わって走ってくつ箱に行った
すると後ろから誰かが追ってきた

「カケルー。そんなに急いでどこいくの？」

マサヒロとタツヤだった

「別に・・・」

そういって振り返ろうとすると、タツヤがそっぽを向きながら言ってきた

「どーせソラのところだろ？」

「なんでわかったんだよ・・・」

「今日みんなが言ってた。」

「そっか・・・。」

「僕たちもいくよ。ね？タツヤ」

「ああ。俺らもあいつと話してみてーって思ってたんだ」

突然の言葉に驚いた。俺以外にもソラに興味を持っていた奴がいた。
なんか、すんげ―ホッとした。まだ、心のどこかでまたあんな想いをするのかと恐れていた…

だから、ちょっと頼りなさそうな二人だけど、すんげ―うれしかった

俺らはソラが住んでいるマンションの入り口まで来た
ソラの部屋は一番上の一番端っこ。超金が高そうなところだ

「す、すっげぇな・・・」

「うん。」

「これ、何階まであるんだよ・・・」

「以外と金持だったのか？」

「そういえば、服も結構いいの着てるよね」

「そういえば・・・親父は社長とかだろうな」

「ってか、あいつに親とかいるんだっけ？」

「そりゃいるだろ。」

そんなこと言いながら俺らは入っていった。
外見もすごければ中身もすごい。じゅうたんが敷いてあって、その
先は大理石のような石が
敷き詰められている。まるで、高級ホテルみたいだ
俺らはソラの部屋に行くために受付の近くまで行った

「なっなぁ。なんて言ったらいいのかな？」

「さぁ。空の部屋どこだ？って聞けばいいんじゃ」

「空でわかるのか？あれ？ってか、あいつの苗字なんだっけ？」

「そういえば、名札にも『空』ってしか書いてないよね」

素朴な疑問を抱え上がらも、三人は受付に行った

「あのッ。ソラの部屋ってどこですか。」

「少々お待ちください。」

どうやら、『空』でわかったようだ。まずは一安心。

受付のおねえさんは、電話をかけているようだ。

「おあいにくですが００１室の方は今おりません。またの機会にお越しください。」

受付のお姉さんは営業スマイルで言ってきた

俺たちはお礼を言って外に出た

「帰ってきてないのか・・・」

「ソラ君どこにいるんだろうね」

みんなでベンチに座って考えた。でも、まったく心当たりの場所が浮かばない

「俺らって、ソラのこと何も知らないんだな」

「ああ。まぁ、空は謎っていうか・・・」

「うん。誰にも心開いてないよね」

そんなことを考えていると、あるところが頭をよぎった

「もしかしたら・・・あそこかもしれない」

第十三話　初めての友達

俺らはダッシュである場所に行った。するとやっぱりそこにはソラがいた
その場所は、そう。俺とソラが初めて遊んだところ
ソラは、ブランコをこぎもしないでただじーっと乗っているだけだった
俺は静かにソラの前に立った。それに続けて辰哉と雄大も俺を挟んで立った

「ソラ。」

俺は静かに呼んだ。ソラは、重たそうな頭をゆっくりとあげた。
しばらく沈黙が続いた。その沈黙を破ったのはソラだった

「ごめん。」

「えっ？」

「俺のせいであんな思いさせて・・・俺わかってたんだ。カケルが傷つくこと・・・でも、
でも、うれしくて。初めてだったから。誰かから誘われるの。だから・・・」

「ごめん。」

俺はソラの言葉を遮った

「ごめん。あのときすぐに言い返せなくて・・・俺、ソラのことき

らいじゃないから！
ずっと友達になりたいって思ってた。」
「僕も！」
「俺も！」
雄大と辰哉が少し前に出てきながら勢いよく言った
「ほんと？本当にいいの？」
みんな笑顔でうなずいた。そして、手を差し伸べた。ソラはその手を握り立ち上がった
そしてみんなで笑った。何か面白いことがあったわけでもないけど、笑った
ソラは涙を流しながら笑った

俺らは日が暮れるまで遊んだ。いつもならすぐに寝てしまう辰哉も今日は寝なかった。
ずっとみんなでブランコに乗っていた
「俺、なんで生きてるのか分からなかった・・・」
急にソラがそんなこと言うから、みんなブランコをこぐのをやめた
「いつも一人ぼっちで、何の変化もなく、時間だけが過ぎて行って。みんなから無視されて、

俺っていう存在が、ないって思えてきて。俺が死んだとしても、みんなは何も気付かずに、
何も変わらずに、時間だけが進んでいくんだろうって・・・そう思うと、どうして生きてるん　だろう。どうして生まれてきたんだろう。って思えてきたんだ・・・。」

「お前・・・そんな難しいこと考えてたんだな」

「うん。でも、今なら分かるよ。俺は、みんなと出会うために生まれてきたんだってこと。
みんなと笑いあうために生きるんだってこと。だから今、すごく思う。生きててよかった
って。」

そういうとソラはハハッと笑った

「ソラ。」

辰哉がブランコから降りてソラの前にきた。

「そんなめんどくせーこと考えんな！ってか、聞いてたこっちが混乱してきた・・・」

それに続いて雄大も

「でも、なんか嬉しいね。」

そして翔

「俺らにとって、空はどんなに手を伸ばしても掴むことができない

奴だったもんな。その名の通り？」

と言って、「いいこと言った！」と言わんばかりに決めポーズを決めていた

「まぁ、こんな奴はほっといて。」

その言葉に反応した翔を雄大が止める

「よーするに、お前は謎な奴だったから、こんな風に自分の事話してくれて、お前が思ってきたこととか、お前自身のこととか知れて、うれしいんだよ！」

「なんで？」

「そりゃあ、友達の事は、知りたいだろ？」

『友達』

その言葉だけで、俺の心は報われた気がした。

第十四話　雨のち晴れ

目覚ましがなる
目をかすかに開けると太陽の光が差し込む
重い体を動かして洗面所に向かう
顔を洗ってパンを食べる
そして歯磨きをして学校へ行く
何も変わらない朝
何も変わらない俺
でも、一つだけ変わった

空はいつものように通学路を歩いていた。相変わらず、町の人たちからの視線は痛い。でも、そんなのは空にとっては当たり前。でも、そこを抜けるとさらに視線が刺さる。そこは学校だ。でも、それも空にとっては当たり前。そこを抜けると今度は教室だ。そこに入るとにぎやかな教室は一瞬にして静まり返る。そして、みんなの視線が刺さる。それが空にとっては普通だったから別に気にしたことはなかった。今日もまた、その当たり前の今日に向かって歩いていた。ドアを開けると教室は静まりあえり、みんなの視線が刺さった。で

も、今日は違った。その静まり返った教室に

「おはよう。空」

という声が響いた。その声の主は、

「・・・おはよう。翔・・・」

そう。昨日、友達になった桐沢翔だ。
クラスの人の視線は空から翔に移った。すると、二人組が教室の中に入ってきた

「おはよう。翔。空」

「ふぁ～。はよー」

そう。この二人組も昨日友達になった横木雄大と比良元辰哉だ。
クラスの人は、いつもの当たり前の光景ではない出来事に騒ぎ始めていた

「はよー。雄大。辰哉。てか、辰哉。お前その挨拶こっちが眠くなんだけど…なぁ空」

そう言って、空の方を見た翔は眼をギョッとして驚いていた。そして、その表情を見た辰哉も驚いていた。

「おっおい。泣くほど俺のあいさついやだったのかよ」

空は、目から涙を一粒、また一粒とこぼしていた。
これは、きっとあの時と同じ。

そう、乙樹先生に教わった、あの

『うれし涙』

「ううん。おはよう。辰哉。雄大」

そういった空の顔はとても晴れ晴れとして、さわやかで、クラス中の人々が空に見とれた。

「今日の空は快晴だな」

そういった翔の言葉でクラス中が笑顔に包まれた

この日から、教室で空に対してとげのある視線を送る人はいなくなった

第十五話　運動会

「はい。みんな。今日から早速運動会の練習が始まる。体操服を忘れた奴はいないか～！あと、
お茶ちゃんとたくさん持ってきたか～！忘れたものは、水道水を飲め！まずいぞ！」

「え～。俺忘れちゃったよ、お茶～」とか言いながら盛り上がるクラス

運動会…
俺にとっては最悪の行事だ…
俺たちの学校は、春に運動会がある。
まだクラスになじめないうちにこんな、クラスが団結して競うなんて最悪だ。
しかも俺にとっては、さらに最悪だ。
また、いつものように、運動会の練習だけサボろう

空はそんなことを考えながら、ボーっとざわつく教室を眺めていた
空は、なぜ運動会という行事にここまでざわつくのか全く分からなかった。
空が運動会に参加したのは、小学校一年生の時、初めて外の世界に出てきたころだ。
しかし、それが最初で最後の運動会だった。
なぜなら

言うまでもないと思うが、人々の視線が空に刺さり、空が参加した種目だけ、冷たい空気に変わった。それから、学校全員の生徒から、

「お前のせいで、運動会が台無しだ」

などという言葉を、すれ違いざまにいやというほど言われたのだ。それからの空は、荒んだ眼をし、心を閉ざし、感情を押し殺したのだった

「なぁ空。お前何の種目でる？俺さ、玉入れしたいんだよね。一緒にやンね？」

いつの間にか隣に来ていた翔に急に声をかけられ、びっくりした空は、大げさにビクッと体を動かした。

「うわっ、びっくりしたぁ～。ってか、どうしたんだ？空」

「いった～……；」

「ひじ…打ったのか？」

空は、必死に痛みをこらえながらうなずいた

空が起こしたあの大きな音に、教室は静まり返り、みんなは必死に痛みをこらえている空に注目している。

「おい・・・空」

「ピーンて…」

「えっ？」

「ひじがピーンってなった…」

「ピーン・・・・？」

ほんの一瞬沈黙になると、次の瞬間翔が爆笑し始めた

「ガァッハッハッハ！なるほど！ピーンな！あのピーンってなるやつな！クゥッフッフ…」

翔は我慢してるのか、爆笑してるのか、わからない気持ち悪い笑い方をしていた。翔に続けとばかりに一人、また一人とこらえきれなくなって笑いだした

「空。おもしれ～」

ずっと痛みに耐えていた空は、痛くなくなった腕をぶんぶんふりながら笑った

「おら～、何爆笑してんだ？早くせきつけー」

一時間目が始まる時間になり、乙樹先生が入ってきた。それでも、翔は、必死に声を押し殺しながら笑っていた。それに気付いた翔の周りの人が笑い始め、また、教室が爆笑の渦に飲み込まれていってしまった。

空は、少し照れながら、みんなと目を合わせながら笑った

「なんなんだよ！先生にも教えてくれよぉ。なぁ」

乙樹先生は、みんなに混ざりたくて、必死にわけを聞きだそうとしている。
が、あまりにも笑いすぎて、みんなうまくしゃべることができず、中には、「トイレ！」と言って駆け出していく奴もいた。それにもまた爆笑して、今日の一時間目は何もせず、笑うだけで終わってしまった。乙樹先生は

「くっそー。次の時間には教えてもらうからな！」

と言って、悔しそうな顔をしながら教室を出て行った

休み時間になり、早速翔がやってきた。

「翔笑いすぎだって。」

「だって～」

なッと言いながら、そばにいた辰哉と正弘に同意を求めた。
辰哉はどうやらまだ笑っているらしい。
すると、いきなり笑うのをやめて、思い出したかのように振り返った

「そういえばさ、さっきは笑いすぎて忘れてたけど、空は、何の種目にでんだ？」

そういえば、一時間目が始まる前にいってたなぁと思いながら空は答えた

「何の種目にも出ないよ。てか俺、運動会そのものに出ないから」

第十六話　光と闇

「俺、運動会そのものに出ないから」

「えっ？なんで？」

「なんでって言われても…」

『出ちゃいけないでしょ？』と言いたかったけど、空はそれが言えなかった。
もし、そう言って『うん。駄目』と翔に言われたらショックだ。
だけど、しつこく問いかけてくる翔に負けてしまった空は、全部吐き出した。

「そっか・・・」

さすがの翔も下を向いてしまった。空はそんな翔を見て、やっぱり言わない方がよかったな。と後悔した。

「空はさ、どうなの？」

「え？」

急に聞かれて困った。俺はどう？そんなこと考えもしなかった。翔はいつも空の考えていた答えと全く違うことを聞いてくる。

「俺は・・・」

「空は、運動会出たくないの？」

「・・・・」

「周りがなんと言おうと、まずは自分がどうしたいのかだろ？」

まただ。翔はいつも俺が考えたことがなかったことを問いかけてくる。
いつもまっすぐに俺を見つめて、無言で問いかけてくる。
でも不思議と、俺はその問いの答えを簡単に見つけられる。

「俺は、俺は運動会に出たい。」

「そっか。じゃ何に出る？」

空が勇気を出して言った言葉に対して、翔は当たり前のようにスルーだ。
この二人は息が合っているのか、合っていないのか・・・・
でも、いいコンビなことは確かだ。

「辰哉と正弘は何に出んの～？」

「俺どれでもいい。」

「辰哉はリレーでしょ？このクラスで一番足が速いんだから」

「えっ！辰哉って、そんなに足速かったのかよ」

「さあな」

「さあなって・・・。んじゃ、雄大は？何に出んの？」

「僕は玉入れかな。」

「おっ！俺も玉入れしたいと思ってたんだよね。空は？」

「はい。席に付けー。2時間目始めるぞー」

ちょうど乙樹先生が入ってきて、この後の話は後になった。

「2時間目は運動会の種目決めをします。4年生は全員参加のダンスと、学年別リレーと、徒競争と、玉入れだ。さぁ少し時間をやるから、何に出たいか考えてー」

「先生。足が速い人は、リレーにした方がいいと思います！」

「うーん。そうだなぁ。みんなそれでいいか？」

クラス全員が賛成した

「じゃあ、比良元辰哉と佐藤昇と桐沢翔と空だな。」

「え？」

「「「空！？」」」

「俺？」

「ああ。辰哉は7秒２８、昇は８秒１１、翔は８秒１４、空は7秒３２だからな。」

「空が7秒台…知らんかった」

「空って足速かったんだね！7秒台なんて辰哉だけだと思ってたよ」

「まぁまぁ、リレーはいいとして、他の競技だな！さぁあとは早いもん順だ！みんな好きなの選べ！」

「そんな適当でいいのかよ…」

「というわけで、リレー組は早速今日から練習するぞ！」

「なんでリレー組だけなんだよ…めんどくせー」

「そうだぜ！こっちには辰哉いんだし、空立っているし練習なんて

しなくても大丈夫だろ！」

「甘いな辰哉も翔も。」

「なんでだよ」

「リレーってのわな、足の速さも大事だが、それ以上に大事なのがあるんだ！」

「バトンパスだろ？」

「うっ…俺が今から言おうと…まぁいい。その通りだ昇。さすが陸上部だな」

「なぁ先生。そのバトンパスってやつ、チャッチャとやっちゃおうぜ！俺ら雄大待たせてんだ」

「今日は辰哉んちでゲームする約束してんだよ。なッ！空」

空は深くうなずいた。

乙樹先生は肩を落として落ち込んだ。

「お前らなぁ、勝ちたいと思わないのか？」

「そりゃ、勝ちたいけどさぁ～、２か月も前からはやる気でないべ」

リレー組４人はうんうん。とうなずいた。

「まぁ、それもそうだな…よし！じゃあ今日はいい！遊んで来い！」

「イェーイ！さすが先生！」

「雄大ー。練習終わったぞー。早くいこーぜー」

「うん」

グラウンドに来るときはあんなにだらだら来てたのに、帰るとなるとすごく早い。

そんな事を思いながら乙樹はわざわざ持ってきたバトンを持って職員室へと向かっていた。

そういえば最近空が明るくなった。翔に空のことを相談された次の日から。

このままでいてほしい。このまま、
ずっと空が明るければいいのに、

でも、

それは叶うことのない願いなんだ。
朝がある限り、夜は必ず来る。
光がある限り、闇がある。
光があるから闇は見える。闇があるから、光がまぶしく見えるんだ。
でも、あと少しでもいいから、空が輝ける時間を、長く、長く。
ただ、そう願うことしかできない。
だって空の未来には、闇しかないのだから…

第十七話　酒井章夫という男

「酒井様。あれから１０年経ち、あの時の赤子も１０歳です。今がいい時期かと」

「そうだな…」

「さて、１０月１０日。日本が破滅へのルートを歩みかけたあの日があと2か月で１０年が立ちます。あの忌まわしき日から約１０年、この国は長がいないながらもここまで財政を整えることができました。それはすべて、あのお方、酒井章夫の力があったからです。この国の憲法であった、『国の長を務めるのは、日和族のみ。しかし、１０年その族の長が表れなかった時、この憲法を削除する。』が実行される日が近づいてきています。今日は、その次の長に立候補している・……」

「長ね～。なぁ母ちゃん。日和族って、この国を裏切ったから殺されちゃったんでしょ？なのになんでこういう憲法とかは守るわけ？もう誰もいないんだから、やぶたってばれないじゃん」

「さぁね。でも、次の長は酒井さんがなるんじゃない？ニュースで

言ってた通り、日本がこんなに和やかになったのは、その人のおかげだし、その前の長が裏切って立って言うのを発見したのも酒井さんだし。」

「へぇ〜。ま、俺は今見たいにダラ〜と過ごせるんなら、誰でもいい！」

「またそんなこと言って。翔はもう。ほらッさっさと学校行きなさい！遅れるわよ」

「へーい。」

学校へ着くと、みんな今朝のニュースの話題で持ちきりだった

「「「おはよー。翔」」」

「おう。おはよー。なぁ空。今朝のニュース見たか？」

「うん。今、辰哉と雄大ともその話してた。」

「俺の母ちゃん、次の長は酒井さんねって言ってたぜ」

「俺の母ちゃんも。そんなにすごい人なんかね？まぁ、俺は誰でもいいけどね」

「僕のお母さんなんて、酒井さんはヒーローって言ってたよ」

「へー。ヒーローねぇ。」

「あんなおっさんがかよ！」

「俺、酒井さんに会ったことあるよ。」

「えっ！まじ！どんな奴？」

「…怖い感じの人。」

「怖い？あんな、どこにでも居そうなおっさんが？」

「うん。」

「やっぱり、テレビと実物とでは違うのかな？」

「じゃね？」

空は一人、酒井と会った日の事を思い出していた・・・
あれは、５年前。
俺が、３歳のころ・・・
その時の酒井は俺を睨みつけ、そして最後にこう言った

「生き延びたければ、逆らわぬことだ」

と。
そう言って酒井は不気味に笑ったのだ。
まだ3歳だったとはいえ、あの不気味な笑顔はあまりにも恐怖だったので今でも覚えている。
が、いまだにこの言葉の意味はわからない。

逆らったら殺す

そういう意味だろうか？
きっとみんな同じようなことを言われたのだろう。
酒井に逆らったらみんな殺される。

そういうことだと思っていた。

第十八話　サッカーと友情

俺と翔、辰哉、雄大は今日もまた公園で遊んでいた。

「よーっし！行くぜ雄大！」

「来い！翔」

「必殺！スーパー☆ゴールデン☆スペシャルキーーーーック！！」

「絶対とーーーーーーーーーる！！！」

「「どりゃーーーーーーーーーーー！」」

ふたりの叫び声とともに公園に風が吹き、砂ぼこりが起こった。
ふたりのやりあいを見ていた空と翔はつばを飲む。

「きっ・・・・決まったのか・・・・」

「雄大が取ったのか・・・・」

徐々に砂ぼこりが消え、あたりが見渡せるようになる。

「とったどーーーーーー！」

砂ぼこりが消えたと同時に、雄大の歓声が聞こえた。

「くっそー！絶対決めれると思ったのに！！！」

「僕に勝つには１００年早いよ。」

雄大が得意げに腕を組んで言った。翔は手をひざにおいてくっそーと嘆いている。

「まぁまぁ翔。相手がワリーよ。雄大は一応サッカー部なんだからよ」

「そうだったんだ。知らなかった」

「んあ？空知らなかったのか！こいつ、すげーンだぜ！選抜に選ばれるくらいだかんな」

「雄大すごいんだな。初めて憧れたよ！」

「ははっ！言ってくれるじゃん空」

最近空もやっと人と接することに慣れてきたらしい。
冗談交じりに笑いあうことができるようになってきた。

４人ともその場に座り、荒れていた息を整えながらしゃべっていた。
するとそこに４人組がやってきた。
一緒にリレーに選ばれた昇と友原汰一、草野陸人、名切陽介だ。
その中の一人、名切陽介がしゃべってきた。

「よぉ翔。いっつもここで遊んでたのか？」

「ああ。いいだろここ！」

「ああ。お前ら４人とも、学校終わったらさっさと帰るだろ？でもお前らが遊んでるとこ見たことなかったからよ。気になってたんだ」

「ああー。ここ結構遠いからな。」

「何やってたんだ？」

「サッカー。お前らもやんねーか？なぁ！いいよなぁみんな？」

「おう。多い方が楽しいからな！」

「僕もいいよ！誰にもゴールはさせないけどね！」

「空は？」

「もちろん！」

空たちは、新たに４人の仲間を加えてサッカーを始めた。
ちょっと前まで、空の事を悪く言っていた奴らも、今となってはハ

イタッチして一緒に喜びあう
『友達』になっていた。

「なぁ空。」

疲れて8人で円になって座っていると、隣の翔から声をかけられた。

「なに？翔」

「お前さ、名前なんて言うんだ？」

「「「「えっ？」」」」

「あ～。ワリーワリー。聞き方が悪かった。苗字だよ。苗字！」

「あっ！それ、僕も思ってたんだ。」

俺も俺もとみんな翔の話題に乗ってきた。

「わからないんだ。」

「なんで？そう言えば、父ちゃんや母ちゃんは？兄弟とかいねぇの？」

「いないよ。」

「じゃあ、ずっと一人…」

「そう。ずっと一人。それが当たり前だって思ってた。」

「でもッ、でもさ！空を生んだ奴はいるはずだよな！」

「でも、今いない…」

「それって」

それ以上は誰も言わなかった。いや。言わなくても分かっていた。
急に静かになり、風が冷たく感じた。
汗が冷えたからだろうか。

寒いのは嫌いだ。
寒さは心も冷たくしてしまうから。
コタツに入っても、暖かい布団に入っても。
心にはいつも冷たい風が吹いてくる。
しかもそいつは、今日みたいに
いきなり吹いてくる。
気付いたら、もう吹いているんだ。

「寒みーな。」

いきなり翔の手が俺の手の上に乗っかってきた。

「うわッ！空の手つめたッ！汗冷えたか？このままじゃ風邪ひくべ。今日は帰るか！」

「そうしよう。また明日遊べばいいしね。」

「おう。じゃ、俺らはこっちだから！じゃーなー」

「おう！じゃーなー。んじゃ空。お前も早く帰れよ！じゃ明日な」

「じゃあな」

そう言ってから、しばらく翔を見送った。

「翔の手、暖かかったなぁ。」

そう思った。

第十九話　出会い

みんなが帰ったのをしばらく見送って空もマンションに向かって歩き出した。
しばらく歩くと街灯がつきだした。
周りの家からは楽しそうな声が聞こえてきた。
息をはくと白く、風が冷たくなった。

もう少し歩くと、商店街が見えてきた。
夜になってもにぎやかだ。
屋根が付いていてあかりがたくさんついている。
昼に通る時とは違って、きれいにデコレーションされたみたいにきれいだ。
空は、初めて夜の商店街を通ったので、見とれた。

そこを抜けるとまた暗い住宅街に出る。
いきなり風が吹きつけてきた。

「本当に春になったのかよ？」

そう思うほど夜は寒くなっていた。
しばらく歩くと、また公園があった。
その公園を通ると近道になる。
公園に入り歩いていると、ブランコに誰かが座っていた。
この公園は土地がせまく、遊具も少ないため、横切るために通る人

以外
誰も入らない公園だ。

「誰だろう・・・」

通り過ごそうと思った空だったが、その人が震えていることに気付き、心配した空は
話してみることにした。

「あの、大丈夫？」

「…ああ。ごめんね」

顔えおあげた人の顔はしわでたくさんの男の人だった。
しばらく空の顔を見た後、にっこりと笑った顔には、さらにしわがふえた。

「寒くねーの？帰れば？」

「そうだね…。でも、帰るところはなくなってしまったからね。」

「なくなった？どうして？」

空は、おじいさんの隣に歩み寄り、ブランコに座った。

「昔、この国の長を含む一族が暗殺されたことがあるのは知っているかい？」

「ああ。知ってる。もうすぐで１０年だから長が変わるんだろ？」

「そう。私はその一族に従えていたんだよ。」

「へぇ～。じゃあんたも裏切り者の仲間だったってことだな」

「そうだな。でも、違う。長は裏切ってなどいない。むしろ裏切ったのは酒井の方だ。」

「えっ？どういうことだよ。それ」

「いいや。ここまでにしておこう。この話は本当はしてはいけないんだ。」

「ここまで言っておいてそれはねぇよ。」

「ごめんね。忘れておくれ。」

「でも。」

「早くお家に帰りなさい。お母さんが待っているよ。」

「待てないよ。俺の家は空っぽ。」

「一人ぼっちなのかい？」

「そーだよ。」

「そうか…さみしくないのかい？」

「じいさんこそ。さみしくないの？」

「さみしくないと言ったらうそになるからね。さみしいよ。とても…」

「そっか…」

「私はね、もし生きていたら君と同じくらいの年になる長の子供のお世話係をしていたんだ。」

「ふーん」

「今日は君と話せてよかった。今日は寒いからね。早く帰りなさい。」

「じいさんは？」

「私は、大丈夫だよ。」

「そっか。じゃ、バイバイ。」

「長…酒井のたくらみは私が壊して見せます。どうか、空様と見守

っていてください。」

第二十話　突然の訪問（前書き）

投稿が遅れてすみません＞m（__）m＜
受験だったので、ずーーーっとPC放置してましたッ・・・；
でも、無事に終わったのでこれからはしっかりとやります。
ですから、これを読んでくださっている方はこれからも、よろしくお願いします☆

第二十話　突然の訪問

『それでは、次のニュースです。新しい長の立候補者が出揃いました。こちらのボードを見ていただきたいのですが・・・・』

朝のニュースが部屋中に響く中、空は大きなあくびをしながらパンをかじっていた。

『やはり、一番可能性が高いのは、酒井章夫さんでしょうね。』

『そうですね～。』

ピンポーン

突然玄関からベルの音が聞こえ、空は驚いたせいでパンを喉に詰まらせた。
すると、もう一度なったので、空は頭をかきながら玄関を思い切り開けた。

「誰だよ。何度も何度も。」

「私だ。久しぶりだね。空君。」

その、何とも優しそうなおじいさんの声を発しながら、どこかドスが効いている声の張本人を見て、空は硬直した。

「酒井・・・さん。」

「入れてもらってもいいかな?」

「は・・・はい。どうぞ・・・」

酒井は家に入るなり、きょろきょろと中を見回し、一番大きなソファーに腰をかけた。

しばらく沈黙が流れ、テレビのアナウンサーの声が響いていた。

最初に口を開いたのは酒井だった。

「急に着てすまないね。私が言うのもなんだが、空君も座りたまえ。

」

「・・・はい。」

空は、素直に酒井の言葉を聞き、酒井の右隣の小さなソファーに座った。

「今日私がここに来たのは、君にある話をするためだ。」

「ある話・・・？」

「空～。やっぱし今日休みかなぁ～。もう2時間目だぜ？辰哉か雄大しらねーか？」

「しらねーな。休みなんじゃ？」

「でも、空が学校休んだことないよね。」

「そだっけ？」

「そうだよ。」

「風邪なんじゃねーの。」

「なんで辰哉はそんなにそっけないんだよ！」

「別に。普通に風邪ひいちまっただけじゃね？だったら、お見舞行こうぜ！あの豪邸に！」

「いいな！それ！賛成ぇ☆」

「確かにあの豪邸は行ってみたいかも・・・。」

「だろ？んじゃ、雄大も決定ぇー！」

「そんじゃ、学校終わったら即行こうな！」

「おう！」

『空くん。君に話があるんだ。』

『話・・・ですか？』

『そう。ご家族の話を。ちょっとね』

第二十話　突然の訪問（後書き）

次回は・・・

教えれな―い？↑きもッ；

第二十一話　明かされた真実

「俺の家族・・・？そんなの・・・」

「そう。君にはいない。今はね。」

話は１０年前にさかのぼる――――

１０年前この国を治めるある一族がいた。その一族の名は日和。当時の景気は最悪。仕事がなく飢えで死んでいく奴が山ほどいた。そんな時ある事実が判明した。それは

『日和家が国を売った』

というものだった。もちろん国民は激怒した。そこで当時長に従える機関にいた私。酒井章夫を中心とする長とその一族を抹殺するための組織ができた。そしてその一年後長のお子さんが誕生し、喜びに満ちた時、その計画が動いた。

１０月１０日。日和家は抹殺された。ただ一人を残して・・・・。

「ただ一人・・・・。」

「そう。その生き残った一人が１０月１０日に誕生した長の子。その名は空。君の名は日和　空。生き残ったたった一人の王族なんだよ。」

「俺が・・・。」

「そう。これでなぜ君が毛嫌いされるのかわかっただろう？君の父親は国を裏切り殺された。そして、君は裏切り者の息子だ。」

「なんで・・・」

「ん？」

「なんで俺も殺さなかったんだよ・・・。俺も殺せばよかっただろ！」

「そしたら苦しまずに済んだ？」

「ッ！」

「一人ぼっちで、誰も自分を助けてくれない。それなら死んでいたほうがましだったと？」

「・・・・・・」

「君は死なせないよ・・・」

「・・・・？」

「この程度で苦しい？死にたい？バカを言っているんじゃないよ！貴様はこれからもっと地獄を見るのさ！もっと下へ！下へ下へ下へ下へ！地面に這いつくばって！嘆き苦しみながらも生きていくんだ！」

酒井は狂ったように笑いだした。

「お前は死なせない。生きて、地獄を見ろ。」

酒井は嵐のように帰って行った。

ニュースのアナウンサーの声が響く。少し冷たい風が空の髪をなでる。
頭が真っ白だ・・・。
俺は王族で、父親は国を裏切り、殺された・・・。
そして、俺は裏切り者の息子。

「頭が・・・痛いッ・・・。」

翔・・・辰哉、雄大。

「助けて・・・・・ッ」

第二十二話　友達だから（前書き）

もし、待っていてくださった方がいらっしゃるのなら、
投稿遅れてすみません＞m（__）m＜
これから、なるべく頑張ります！
たぶん・・・（↑オイッ！

第二十二話　友達だから

雲に覆われた空。
くすんだ太陽。
少し冷たくなった風。
超高層マンションの前に立つ3人の少年たち。

「あいッ変わらず、でっけーなあ～。」

「空の家って、このマンションの一番上の一番はじっこだよな・・・。」

「うん。００１室だよ。まえ来た時、受付の人が言ってた。」

「おい。雄大！先に行けよ・・・」

「え～！なんで僕なのさ！そういう翔が行きなよ。」

「やだよ！オレ、こういう高そーな所イヤなんだよ・・・！頼む（＜＿＞）」

「え～僕だってヤダよ！辰哉！パス。」

「なんで二人ともそんな嫌がるんだよ・・・？前にも入ったじゃんか。」

ほら行くぞ！といいながらずかずかと入っていく辰哉を後の二人はぎこちなくちょこちょこと小走りで追いかけた。

「００１室の空に用があんだけど。」

「００１室の方ですね？少々お待ちください。」

受付につくと片膝を置きながら、無愛想に辰哉は言った。
こんな態度にも受付の人はにこやかな営業笑顔で答え、そばにあった電話に手をかけた。ある番号を押して、受話器を耳にあてた。

「こんにちは。こちらは受付でございます。お客様が３人いらっしゃっているのですがお通ししてもよろしいでしょうか？」

少しの沈黙を置いて受付の人は受話器を離して俺らに名前を聞いてきた。
どうやら、空に聞かれたらしい。

「えーっと、俺が翔で、あと辰哉と雄大です・・・。」

なれない敬語を使う翔に、辰哉と雄大は噴き出した。翔はそんな二人を少し睨んだ。

「翔様と、辰哉様、雄大様です。」

受付の人は受話器を置いた。すると横のガラスの分厚い扉が開いた。どうやら空が承諾したようだ。

「どうぞ、お通りください。００１室はあちらのエレベーターで最上階まで登って、左に行っていただくとそこにございます。」

俺たちは軽くお辞儀をしてエレベーターに乗った。
エレベーターは外の景色が見えるようになっており、ジェットコースターのあの一気に下る前の感じと似ていた。
最上階にまではすぐに付いた。降りるとすぐ左に００１と書かれたドアが見えた。

「空―！俺だぞー。」

「おい。翔！そんなでかい声出すなって！」

「そうだよ。さっきまでは、高そーな所はいやだとか言ってたくせに。」

「まあまあ。」

翔が適当に流していると、
ガチャ
と音がして、空が出てきた。

「おー空!元気か―?遊び来たぞ（＊^^）v」

「遊びじゃないよ翔。お見舞いだよ。」

半分あきれた感じで雄大は言った。

「まぁ、まずは入って。」

あれ?空、なんか元気・・・ない・・・?

ふと翔は思い、辰哉と雄大に目を合わせてみた。
だが、二人はあまり気付いていないようだ。

気のせいか・・・・。

「大丈夫？空。」

「何が？」

「何がって、今日「うおー！テレビでけー！！」」

「ソファーふかふか！ひゃっほー！」

「ちょっと二人とも！今日は空のお見舞いにきたんだからさあ！」

「お見舞い？あ～、そっか。今日オレ休んだんだった。大丈夫だよ。元気元気！」

「ホントか？」

「な・・・っなに？」

さっきまで騒いでいた翔が急に空に詰め寄ってきた、空は少し後ずさった。

「なあ空。お前ゲームとかもってねーの？」

辰哉ナイス！と思いながら、空は逃げるように辰哉のもとへ向かった。

「あるよ！ちょっと待ってて。今持ってくるから！」

空の奴。ぜってぇーなんか隠してる・・・。
でも、今まで何かを隠そうとすることなんてなかったのに・・・。
なんでだろう・・・。

「うがー！空強えーな！」

「ほぼ毎日やってたもん！」

「うわっ！もうこんな時間だ！」

いつの間にかゲームに熱中していた４人は時間を忘れていた。

「まじかよ・・・。母ちゃんに怒られる（＜へ＞）；」

「俺ら帰るけど、翔はどーする？」

翔は空をちらりと見た。

「いや。俺はまだここにいる！お前ら先帰ってて。」

「わかった。じゃあな～二人とも～」

「バイバイ。空。翔。」

「ばいばーい。」

「じゃな―。」

玄関のドアのガチャンという音が響き、部屋はしらけた。
いつもなら、騒がしい翔が今日はやけに静かだ。
ゲームの時も一人で何か考えてるみたいだった。

どうしたのかな・・・？

「なあ空。」

ゲームの後片付けをしている時に、急に声をかけられたので、空はびっくりしてゲーム機を落としてしまった。

「なッ何？」

「お前。なんか隠してるだろ。」

「え？」

「え？じゃねえよ。今日、ずっと元気なかった。」

「それは、翔の方じゃ・・・」

「オレ？俺はいつも通り元気だぜ？」

「でも、ゲームの時もなんか、ずっと考えてるみたいだったし。」

「だから、今日の空は元気ねーなあって、考えてたんだよ。」

「・・・・・。」

「やっぱり！お前今日無理して明るくしてたみてーだけど、俺の目はだませねえぜ！」

空はふいてしまった。

「言えよ。『友達』だろ？」

「・・・俺。」

空の目から涙があふれ出してきた。けれど、空はそれを必死にこぼれおちないようにこらえていた。

「俺、裏切り者なんだ・・・。」

第二十三話　打ち明けた真実

「裏切り者・・・・？」

そう。
俺の家族は長年この国を治めてきた王族。日和家。
でも、その１９代目の長である俺の父親が国を裏切り、そして、殺された・・・。
信じられなかった・・・。
信じたくない。
でも・・・

『これでなぜ君が毛嫌いされるのかわかっただろう？』

『貴様はこれからもっと地獄を見るのさ！』

『お前は死なせない。生きて、地獄を見ろ。』

「なんだよそれ！！！」

いきなり叫んだ翔はうつむいていた。
そして、強く強く握った手が、かすかにふるえていた。

「なんで空の父ちゃんが国を裏切ったからって、空が苦しい思いしなきゃなんねェんだよ！！！？空はなんも悪くないじゃんか！！！なんで空が地獄見なきゃいけねェんだよ！てか！酒井ってやつ！意味わかんねェ！空に恨みでもあんのかあ！！？そうか！お前がいたら新しい長になれないから空をいじめてんだ！！！んあ！？でもそれなら空居ない方が・・・・。ん？～～～～～わかんねぇーーー！！！」

翔は思い切り頭をかき乱して叫んだ。

「翔。翔は俺が王族だってことに驚かないのか？」

「んー。驚いたは驚いたけどー・・・。」

翔は言葉が見つからないのか手をあーしたりこーしたりしながら言葉をさがしていた。

「ああーーー。もう！なんて言うか、そういうの関係なくね？親とか名前とか、そんなんどうでもいい！お前は日和空って名前で、王族で、でも俺の友達で。それは変わらなくて。ま！どーでもいいってことだ！あはははは～。」

とうとう笑いでごまかしてしまった翔があまりにも豪快に笑うから、俺もつい、笑ってしまった。
翔は俺の事を、一人の人間として見てくれる。
周りなんて関係なく、まっすぐ俺にぶつかってきてくれる。
俺に友達は少ないけど、翔は俺の事をちゃんと理解してくれる、数少ないうちの一人だってことはわかる。翔だけじゃなく、辰哉や雄大、そして乙樹先生も。

大丈夫だ。
俺は一人じゃない。
これから、もっと苦しいことが待っている。
そう酒井はいった・・・。
でも、大丈夫だ。

「うん。大丈夫！」

「んあ？大丈夫なのか？空。」

「おう！ありがとな翔！」

「なんかわかんねえけど、まあ空が元気になったんならいいさ！」

それから俺たちはゲームをして、いつもみたいにはしゃぎまくった。
まあ、そのあと家に帰った翔はひどく怒られたらしいことは、言うまでもない。

「とうとう明日が選挙だ。」

「はい。とうとう。この国が変わる時です。そして、」

「ふふふ、はははは！苦しめ。日和　空ぁ！！！！！」

第二十四話　始まり（前書き）

遅くなってすまそッ＞m（__）m＜
毎日毎日課題が多くて・・・・
でも、極力頑張るッ！

第二十四話　始まり

今日は１０月１０日。
日本が変わる大きな日。
というのは、憲法『国の長を務めるのは、日和族のみ。しかし、１０年その族の長が表れなかった時、この憲法を削除する。』により、その通りこの憲法が削除され、新しい長が決まる。
そしてその長に立候補したのは酒井をはじめ５人。
その一人を決める選挙が始まる。

しかし、結果は決まっていた。

～翌日～

「おはようございます。先日行われた選挙の結果が今朝、発表されました。５人の中でダントツトップで選ばれました・・・・」

某記者会見

「見事ダントツで選ばれましたが、国民の皆さんへ何かありますか。酒井さん。」

堂々と立ち上がった酒井にシャッターを押す音やフラッシュが止まることなく響いた。

「えー。本日は長に選んでいただきありがとうございます。わたしに期待してくださった皆さん、そうでない方々にも満足していただくような政治をしていきたいと思います。これから、どうぞよろしくお願いします。」

酒井は深々と頭をさげ、いかにも優しいおじいさんのようにしわを寄せ笑った。

そして、この瞬間から、日本は本当の破滅へと進んでいくことなど、誰も知るよしなどなかった。

今はただ、日本中が歓喜に包まれていた。

「わたしの政治に口出しをするものはいらない。そうだ。新しい憲

法を作ろう。こう言うのはどうだい？

『わたしに逆らったものは死刑。』

いいだろう？早速国民に知らせてくれ。」

「ですが長。それはあまりにも理不尽では・・・。」

「誰に口をきいているんだい？君は早速この憲法に反した。」

「そういうつもりでは。」

「言い訳は聞きたくない。そうだ。君をいい見せしめとしよう。公開処刑を行う。決行はあすだ。」

「そんな！待ってください！わたしには家族がいます。わたしがいなくなったら妻は・・・子どもたちは・・・！」

「これはもう決まったことだ。最後に家族に会ってくるといい。」

「待ってください！長！長ッ！！！
くっそーーーーーーーーーーッッッ！！！！」

「なあ空。」

「何？」

「大丈夫かな。」

「何が？」

「あいつが長になってからまだたったの二日なのに、こんなにあっ

さり変わっちまうんだな。」

「ああ。」

「辰哉の父ちゃん、明日処刑だって・・・・。」

「えッ！？なんで！？？？」

「新しく憲法できただろ？それに反対したからだってさ。辰哉、泣いてた。当たり前だよな・・・・。」

「やめられないのかよ？」

「無理だよ。もし反対でもしたら俺らも殺される。」

「そんな・・・・。」

なんともやるせない気分だった。
今日の空は重っ苦しい雲に覆われていた。

第二十五話　古き日の幸せ

１０月１３日。３日前の日本なら子供たちは元気よく学校へ行き、
大人たちは仕事場へ向かう。

主婦たちは洗濯物を干し、すがすがしい朝の光に目を細める。

しかし、

このような朝がくることは

きっと、もう二度とないだろう・・・。

あのころが、あの当たり前の平凡な日々が

何よりも幸せなのだと

人は、失って初めてわかる。

そして、ひどく後悔するのだ。

今日は学校はない。なぜなら・・・・。処刑があるからだ。しかも、辰哉のお父さんが・・・。
東京の特に新宿に住む住民は処刑台への集合がかかっていた。
その時間までまだ時間があるのでテレビをつけてみた。
しかし、どこのチャンネルを回しても、同じ番組。
すべて、今日の処刑のことだった。
辰哉も見ているのだろうか・・・・。
様子を見に行こうかと思った空だったがそれはやめた。
きっと、最後の家族の、父親のぬくもりを感じていると思ったから・・・。

そんな辰哉や家族のために、俺はただ、少しでも時間がゆっくり進むことを願った。

処刑まで1時間となった。
空は、集合場所である広場にきた。まだ人は少ないが、そこには翔と雄大。

そして、二人の家族がいた。

すぐに声をかけようと思ったが、自分が呼びかけたら、二人が家族に怒られるんじゃないかと思うと近寄れなかった。いや。たぶん自分が憎い目で見られるのが怖いんだ。

しかし、広場には人が少ないのですぐにばれてしまった。

「空・・・。」

「翔・・・。雄大も・・・。」

「おはよう。空。」

「・・・・・。」

二人とも元気がない。きっと二人とも俺と同じことを考えていたんだろう・・・。

「あなたが空君？」

突然、翔の母親から声をかけられた。

「・・・・・・・ッ。」

女の人に話しかけられるのは初めて・・・というか、こういう大人と声をかけられることがなかったなかったから、返事が声にならなかった。だからおれは必死に首を縦に振った。

「ふふッ。そんなに首をふらなくてもいいよ。翔がいつもお世話になってるみたいで。ありがとね。」

びっくりだ。話しかけてくれたことにもだけど、笑いかけてくれた・・・。

今まで、お母さんっていうのは、俺を誰よりも煙たがっていた。俺の事を、まるで悪魔を見るように、自分の子供をその腕に抱いて、睨みつけてきた。

そんな記憶しかないから、翔のお母さんのやわらかい笑顔が俺にとっては初めての事で怖かった。

「空？どーした。」

「・・・いや。ちょっとびっくりしただけ。」

「びっくり？」

「うん。大丈夫。それより・・・・」

「ああ・・・・。」

「辰哉・・・大丈夫かな・・・・」

今まで黙りこんでいた雄大が口を開いた。
それは、俺たちも思っていたことだが、幼馴染の雄大とは比べられない。それくくらい重かった。

処刑まで、後４０分

第二十五話　古き日の幸せ（後書き）

新宿って出てきましたけど、リアル日本のようなところではないです。
山とかもあって、ただ少し品ぞろえが良くて、便利な所ってだけです。
そんなに技術は進んでない設定なんで・・・

というか、前の投稿から間があきました。
申し訳ないです。（↑いまさら！？

第二十六話　一人目の犠牲者

１０月１３日

午前１０時

比良元　辰郎　３８歳

憲法第５６条に違反したことにより

処刑された

直後、女性の悲鳴が響き渡り、あたりは騒然とした。

翔は目を見開き、その瞳には恐怖と悲哀がうつっていた。

雄大はくちをがくがくと震わせ、崩れ落ちるように泣いた。

空は、ただただ呆然と立ち尽くした。

ふとその目に辰哉がうつった。

そのうつった姿に目を離すことができなかった。

いつものしかめっ面のしまりがない顔とは全く違い、怒りに満ちあふれた形相で、

きっと本人も気づいていないだろう。次から次へと涙がこぼれていた。

痛い。

苦しい。

つらい。

息ができない。

隣では母ちゃんが泣いてる。

肩を震わせて、体を小さく丸めて。

いつもじゃあり得ないくらい小さく。小さくなって。

どうしよう。

苦しい。

母ちゃん。父ちゃん。

母ちゃん。

父ちゃん。

とうちゃん・・・。

１０月１３日

午前１０時

比良元　辰郎　３８歳

酒井章夫によって始まった最悪の時代の

最初の犠牲者となった。

第二十七話　亀裂

処刑から1週間が過ぎた。
その間にもたくさんの者が次々と処刑された。
学校は閉鎖。
だから新しくたまり場所を作った。
辰哉はあれから全く見なくなった。
雄大は毎日泣いた。
翔は雄大を慰め続けた。
俺は辰哉をさがしに毎日町を歩いた。

今日もまた町を歩く。
雄大も翔も今日は一緒に来てくれた。
町は以前のように活気はないが、一部は変わらずにぎやかだ。
ビジネスマンが急がしそうに行き来する。
段ボールを敷いて寝ている人や、明らかに１０代前半の人がタバコを吸いながら話している。
翔らしい人物は全く見当たらない。
適当に歩いると、酒井のビルの前まできた。
周りにはぎっしりと警備の人で埋め尽くされている。
「すっげえな。」

最初に口を開いたのは翔だった。

「そだね。」

雄大はビルのある一か所から目をそらさずに返事をした。

「もう帰ろう。」そう言いかけた時、ビルの中からずっとさがし続けていた姿が目に映った。

空のただ事ではない顔に翔と雄大も、空の目線の先を見た。

「辰哉・・・。」

雄大がつぶやくように言った。辰哉がその声に気付き目があった。

「みんな・・・。」

「辰哉！」

雄大はうれしさのあまり、辰哉のもとに走り寄った。

しかし、それはぎっしりと埋め尽くされた警備によって拒まれた。

「離せよ！！」

突然捕まえられた雄大にびっくりして空と翔も走り寄った。

空は警備によって、右の方へ飛ばされた。

しかし、辰哉は何も言わずにビルの中に入って行こうとする。

うつむいているため表情が見えない。

「辰哉！辰哉！待って！心配してたんだよ！」

「・・・・・・・。」

「辰哉！なにかあった？俺に話てよ！」

「・・・・・・・。」

「おい辰哉！何黙ってんだよ！辰哉！」

雄大と翔が叫ぶ。しかし辰哉はなにも言わない。

「辰哉・・・？」

一瞬、辰哉の口が動いた。

しかし、ごくわずかでなんていているのかわからない。

空は呼びとめようとしたが、辰哉はビルの中へと入って行ってしまった。

その後俺たちはたまり場に戻ってきた。

「なんなんだよ辰哉の奴！なんであのビルに・・・。」

翔は怒りがおさまらないようだ。ずっとこのようなことを言っている。

雄大は余ほどショックだったのか、目に涙をためている。

「ねえ。辰哉さ、最後になんて言ってた？」

「は？なんも言ってねーじゃん。俺たちが捕まってんのに振り向きもせず入って切ったぜあいつ！」

「雄大は？」

「僕も何も聞こえなかったよ。」

どうやら、最後のは右の方にいた俺にしか見えていなかったようだ。

「そっか。でも、辰哉最後に何か言ってたよ。俺、右の方にいたから見えたんだ。」

「本当？なんて言ってた？」

「それが、よくわからなかったんだ。」

「でも、なんで辰哉はあのビルに入って行ったんだ？」

最後に行った翔の疑問だけが、たまり場内に響いた。

いつの間にか暗くなったのでその答えは出ないまま解散した。

第二十七話　取り戻せ！（前書き）

遅くなって大変申し訳ありません！

ですが、これからも間が結構開くと思います。

本当に申し訳ないです。

それでは、半年振りで話がよくわからなくなってきましたが、どうぞ読んでください！

第二十七話　取り戻せ！

あれから、俺たちは毎日酒井のビルに行った。
しかし、中に入るにはもちろん、前を通る時ですら警備に止められた。
なので、警備がうすい裏の駐車場の向かいの花壇に身をかがめながら見張っていた。
そうしていると、あることが分かった。
それは、辰哉が毎日処刑台へ行くことだ。
その目は悲しみにあふれていた。しかし、どこかあきらめているようにも見えた。

今日も辰哉は出かけるようだ。
しかし、いつもついて来る見張りの奴らがいない。
翔、雄大、俺は目配せをした。

いつも通り処刑台にやってきた。

でも今日はいつもちょっと後ろからついて来る見張りの奴らがいない。

まあ、俺はそっちの方が気が楽でいいけど。

それにしても、もう昔のことみたいだなあ。

母ちゃんは元気なのかな。最近ずっとあってない。というか会わせてもらえない。

父ちゃんの次は母ちゃんか？

いや。そんな頃はゼってぇにさせねえ。

そういえば、この前雄大と翔と空が来てたっけ。

なつかしいなあ。

俺。もうあそこに戻れないのか・・・。

「動くな！静かにしろ！」

「ッ！！！！」

いきなり後ろから目隠しをされ、手を拘束された。

「誰だ！離せッ！」

「辰哉。俺だ。」

「ッ！　翔か・・・？！」

「そっ。とにかく静かに。こっち来てくれ」

俺は黙って翔に従った。
するとある場所についたらしい。目隠しを外してくれた。
そこには辰哉と空がいた。

「ここ、俺たちの新しいたまり場。」

「辰哉ッ！」

いきなり目の前に立ったのは雄大だ。
怒られると思い、顔を上げられなかった。

「元気？」

「ごめん！・・・・・え？げんき？」

「うん。元気？」

「おう。げ・・・元気・・・。」

「そっか。僕も元気！」

そう言って雄大は笑った。
久しぶりに見たのと、雄大のあまりの笑顔にうれしさと安心感が生まれ思わず涙が出た。

「おッ！辰哉がないてるぞ！」

「ホントだ！男泣き～」

翔と空にからかわれてるのに、涙がどんどんあふれた。

「ふ～ん。そんなことがあったのか・・・。」

あれから落ち着きを取り戻した辰哉から事情を聞いた。

辰哉父が処刑されてからすぐに辰哉が拘束されたこと。

それからはあのビルにずっと閉じ込められていたこと。

今は、酒井の駒として働かされていること。

「ひどいよ！辰哉が何したんだよ！！」

「雄大・・・。」

「そういえばさ、辰哉。あの時、俺たちが辰哉を見つけた時なんて言ってたんだ？」

「え・・・？」

「そうそう！空言ってたよな！辰哉がなんか言ってたって。」

「・・・・・なんでもない。」

「んあ？なんて？」

「だから！なんでもねえよ！！」

そういって赤くなった顔を隠すように辰哉はそっぽを向いた。

それに気を悪くした空と翔はさらに詰め寄った。

それに雄大まで加わってきたが、全力で話を反した。

第二十九話　企み（前書き）

今日は唯一時間があるから！
２個目☆

第二十九話　企み

辰哉の話では酒井は日本を完全に自分の支配下にし、操ろうとしているらしい。

詳しい事情やたくらみは辰哉には教えてくれないそうだ。

「なあ辰哉。お前あそこから逃げられねえのか？」

「・・・」

「そうだよ！ぼくたちが辰哉も辰哉のお母さんも守るから！」

「無理だよ。」

「なんでやってないのにできないって言うんだよ！」

「翔も雄大も落ちつけよ！」

「んなこと言ったって！つーかなんで空はそんなに落ち着いてんだよ！！！」

「俺は酒井がそう簡単に自分の駒を逃がすようなことはしないと思う。」

「それって？」

「今日はいつもの見張り役がいないだろ？」

「それ、俺も気になってた。いつも絶対について来んのに・・・」

「絶対何か理由があって辰哉を自由にしてるんだよ。」

「何かって？」

「うっ・・・・。」

沈黙が４人を包んだ。

その沈黙を破ったのは辰哉だった。

「とにかく今日は戻る。怪しまれたら外にも出してもらえなくなるかも出しな。」

「そだな。」

「辰哉。元気で。」

「おう！」

そう言って辰哉は笑顔で去って行った。

それが辰哉を見た最後の日になった。

「比良元　辰哉君。ご苦労だった。」

「いえ。」

「どうだたかい？君の仲間たちは。」

「以前となんら変わりはありませんでした。」

「そうか。これからも見張り頼むよ。あの子たちは、いや。空とかかわって唯一生かしてやっているのだからな。」

「・・・はい。」

辰哉は悔しげな顔で部屋を出て行った。

第三十話（前書き）

今回意味がわからん。
まあ、自己満で書いてるからいいか！

第三十話

あれから一カ月が過ぎた。

辰哉とはあれ以来会うことはなかった。

そして、町はだんだんと前のように活気が取り戻され学校も始まった。

しかし、クラスは前のようにとはいかなかった。

クラスで一つだけ開いている机がそうさせなかった。

ある広い部屋で、二人の男が話していた。一人は社長椅子に。もう一人はその男の前に立っていた。

「酒井様。とうとう明日ですね。」

「ああ。そうだね。」

「落ち着いていらっしゃいますね。」

酒井は座っていた椅子から立ち上がると、大きな町を見渡せる窓の前に立った。

「まさか。ただ、これから起きるショーを見逃したくないだけさ。」

部屋には不気味な笑い声が響いた。

「空！」

「あ！乙樹先生！どうしたの？」

「ちょっと近く通ったからさ。何してたんだ？」

「俺は「空ー！っお！乙樹先生じゃん！どしたの？」

「翔と一緒だったのか。」

「そう。翔と遊んでたんだよ。んで今日俺ん家に泊まんの」

「そうそう！んで先生は？」

「いや～。俺も空の家行こうかと・・・。」

「先生が？なんで？」

「いや。明日は大変だろうからさ。」

そういった乙樹先生はすごく悲しそうに笑った。
だから「どうして明日は大変なの？」とは聞けなかった。

「それじゃあ今日は3人だな！」

ベットたりないなあ。布団しいて3人で寝るかなあ。

なんていいながら空と翔はさきに歩いて行った。

空は鋭い。

だから、きっと何かに気付いたはずだ。

それでも何も気にせず触れないでくれる。

本当に優しい子だ。

なのに、どうして・・・

『あと少しだけ、空が輝ける時間を』というあの時の願いはたったこれだけしか、

たったの7か月しか叶えてくれなかった・・・。

「先生早く！入れてやんないぞー。」

空の方を向くとそこにはきれいな夕日があった。

「空。今日の空は快晴だな。」

「それ俺も前行ったぜ！」

「おう！これからもずっと快晴だ！」

「ええ～。そしたら干からびちまうよ。たまには雨もよろしくな空！」

「俺は天気は操れねえよ。それとも俺に泣けって言ってんのか？」

「そうそう！泣け空！もちろん『うれし涙』だけど！虹付きで！」

「いいや。」

「先生？」

「雨なんて降らなくていい。

これから先もずっと。」

どうか、晴れ渡っていて。

第三十四話　別れ

ザァ――――――

――――ごめんッ…

「――――ッごめッ――――ごめんッごめん！」

――――空ッ

『別れ』

「――――…らッ――――――そらッ！空！」

折角心地よく寝ていたのになんなんだ。と思いながらも、焦った声に目を開けることにする。

「乙樹せんせぇ？眠い・・・」

目を開けてみたはいいが何にしろ眠い。
時計に目を移せばなんとまだ3時じゃないか！
瞼が重い。
これはすぐにでも寝れそうだと思いながらも懸命に起きる。

「すまん空。逃げてくれ。」

「うん。・・・・え？今何ッ

「逃げるんだ！」

「いや、だから何で？」

いきなり先生が怒鳴るから、隣で寝ていた翔も起きた。

「何なに？」

「逃げるんだ！今のうちに！」

「は？逃げる？何々どゆこと空？」

先ほどから「逃げろ」の一点張りの先生に何かを読み取った空はすぐに着換える準備をし始めた。

「わかんないけど、とにかく逃げよう。そーした方がいいんでしょ？先生」

「ああ。」

苦しげにうなずく先生に翔も着換え始める。

――――大丈夫だ。絶対に空は守る。これからすぐに逃げれば・・・

空が鋭い子供で良かったと改めて感じた乙樹だったが、考え事をしているうちに着替え終わった空と翔が来た。

「いいか。翔はすぐに家に帰るんだ。空とはここでお別れだ。」

「ッ!?なんで?俺も行く!なんかわかんねえけど空・・・。あぶねえんだろ??」

「翔。帰って。」

「空!?」

「大丈夫。俺には先生がついてる。」

「でもッ「翔!」・・・分かった。でもその前に先生!なんで空は逃げなきゃなんねえの?」

翔の言葉に空も疑問の目を向ける。

いずれはわかる事。ふたりに言っておこうと、決断しふたりに目線を合わせる。

「これから空は命を狙われる。」

「「！！！」」

「俺は空を助けたい。だから逃げてほしいんだ。」

「・・・それは、俺が日和家のものだから？」

「ッ！！！！」

「俺、知ってるよ。俺は日和家の生き残りでみんなに嫌われてたことも酒井が俺、いや。俺たち日和家を恨んでることも。」

「なんで・・・！？」

「酒井から聞いた。」

そんなッ！？こんな残酷なことをあいつはッ！！！
いや、落ち着け。俺が焦ってどうする！今一番不安なのは空だろう！

「・・・そうか。翔もこのことは・・・？」

「知ってるよ。空に聞いたから。」

「ならわかるよな？」

乙樹先生が言いたいことは、酒井が俺を殺そうとしていることだろうな・・・。
でも、先生が俺を逃がしたら・・・

「先生。わかるよ。だから、逃げる。」

「そうか。なら「一人で逃げる。」

え・・・？」

「空？」

「俺一人で逃げる。先生はついてこなくいい。」

「そんなッ空！一人じゃダメだ！ぜってぇ！」

「翔。早く家に戻れ。」

「ッ！！！お前・・・お前一人でなんとかできる問題じゃねえだろ！？」

「その通りだ。俺がついて行けば絶対大丈夫だ。心配すんな！な？」

「乙樹先生。このことがばれたら先生どうなる？先生には家族がいる。翔にだって。それに、俺とっておきの逃げ道知ってるんだ！昔この町抜け出そうとしてた時見つけたんだ。絶対に見つからない。だからさ！大丈夫！」

『来るな』そう言っているとしか聞こえない空の言葉にふたりとも押し黙った。
それを確認した空は玄関へ向かう。

一度だけ振り返り家の中を眺める。
なんとなく、もう二度と戻ってこない気がした。
一人で暮らしていたこの部屋は改めてみると大きかった。
１０年間。それは長かった。
最初は何も者がなかった部屋にいつしか翔たちと遊ぶゲーム機、おかし、パーティの道具、漫画
いろんなものがあふれた。
大嫌いだったこの部屋が、監禁所のようだったこの部屋がぬくもりにあふれた場所になった。

「ばいばい。」

ばいばい。翔。乙樹先生。辰哉も隆弘もクラスのみんなもこの部屋も。

玄関のドアが「カチャ」という音を立てて閉じた。

空は黒い分厚雲で覆われていた。

「先生。空とまた会えるよな？」

「・・・・・。」

何も言えなかった。子供一人で国を相手に逃げ切れるとは・・・正直思えない。
それなのに俺は、
空を守るなんていったくせに、
これじゃ、守れない云々ではない。
見捨てたも同然じゃないか・・・。

「翔。家まで送る。」

「先生・・・。空死なないよな？」

「翔今日の事は忘れるんだ。絶対に誰にも言っちゃいけない。お母さんにもだ。」

「先生！！！」

「たぶんもうすぐでここに酒井の手下がくる。早く出るぞ。」

「話聞けよ！！！逃げんじゃねえ！！！」

「いうことを聞けッ！」

「ッ！？」

「早くここから逃げなければ俺もお前も犯罪者だぞ！？」

「だったら何だよ！！」

「強がるな！・・・怖いんだろ？」

「ッんなこと！」

「俺は怖い。」

「！！！」

「だから、逃げよう？」

正直、怖かった。空が死ぬのはいやだ。絶対にいやだ。でも・・・

でも、今日の事がばれて俺が死ぬかもしれない。

辰哉みたいになるかもしれない・・・

父ちゃんも母ちゃんも罰を受けるかもしれない。

ごめん・・・

「ごめんッ・・・空ぁ！」

『ニュースです。今朝酒井様から新たな命が出されました。その内容は

「日和家の生き残り、日和空を抹殺せよ」です。

また、この命を果たした方には恩恵として、これから先その方とご家族、未来永劫に自由を保障するするそうです。」

自由になりたければ、捕えよ。

哀れなあの子供を・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5204g/

ｓｋｙ-そら-

2011年10月5日21時16分発行